

# 「語劇」による教育効果の多様性

啜 絵 里

## 1. は じ め に

生きた外国語を学習する方法として語劇が行われることは決して稀なことではない。小・中・高等学校の文化祭や発表会等で「英語劇」が上演されることもある。東京外国語大学、上智大学外国語学部、大阪大学外国語学部の語劇祭は毎年活発に実施されているイベントらしく、広く認知されているようだ<sup>1)</sup>。だが、実際には教師や学生への過度な負担や小道具や衣装などの経済的な問題などから、演劇あるいは演劇的要素をカリキュラムに入れている大学は極端に少ない。しかし、近年において文部科学省の指導要領が変化し、主体的な学生を育成する必要性が出てきたという背景を考えるならば、今まで敬遠されがちだった「演劇教育」を見直す必要があるのではないかと考えられている。そのため、2005年から桃山学院大学にて毎年実施されてきたイタリア語劇を例に挙げ、演劇教育の可能性について探りたい。

## 2. 語劇の語学教育上の効果

### 2-1 小学校の英語劇

小学校では2011年度（平成23年度）より、「外国語活動」が必須科目と

---

キーワード：アクティブラーニング、イタリア語教育、演劇教育、  
ドラマ教育、キャリア教育

なり、第5・6学年で英語を学習することになった。その際、文部科学省によって作成された共通教材『英語ノート2』のLesson8「オリジナル劇を作ろう」において英語劇が導入された。翌年、その教材は「事業仕分け」の関係で廃止対象となったが、新たな外国語活動教材である『Hi, friends! 2』でも、Lesson7に「オリジナルの物語を作って演じよう」という単元が残った<sup>2)</sup>。題材がロシア民話である『おおきなかぶ』から日本の民話『桃太郎』へ変更された。時間数が4時間から6時間に増えているため、文部科学省がオリジナル劇を推進しようとしている動きが感じられる。各学校では2年間の外国語学習の成果として、また卒業する6年生の思い出作りとして、他学年や保護者への発表の場を設けるなど、さまざまな工夫を凝らしている様子がわかる。このような英語劇の教育効果について、佐野（1990）が以下の8点を挙げている<sup>3)</sup>。

1. コミュニケーションに関わる心理的要因を強化する。
2. 「聞く」「話す」言語活動としてすぐれている。
3. 非言語的手段と結びつけて英語を理解し表現する。
4. 場面や文脈のなかで英語を理解し表現する。
5. 英語での自己表現力を伸ばす。
6. 楽しみながら英語を学ぶことができる。
7. 生徒に英語学習の目的意識と成功感を与える。
8. 英語劇はALT [Assistant Language Teacher] との共同作業の絶好の機会となる。

文部科学省の指導要領によると、小学5・6学年の外国語活動は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表

## 「語劇」による教育効果の多様性

現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標<sup>4)</sup>としており、佐野（1990）が求めた語劇による教育効果への期待が感じられる。大学生になって初めて他言語を学習する場合は、小学生のように「遊び」感覚を取り入れた体験型学習は必要がないと思われるかもしれない。しかし、大学生だからこそ学習者の主体性を高め、かつ高次な教育につながる体験学習が必要だと論者は考えている。

### 2-2 大学の語劇

大学において語劇をカリキュラムに加える例は少ないが、京都女子大学文学部英文学科は英語劇上演に取り組むプロダクション形式のゼミを開講している。指導者である日高（2012）は、大学教育における英語劇上演の意義として、①英語教育の多様化と実践的指導の充実化、②個々人の読解力やリスニング力のみならず、対話を前提とした表現力やコミュニケーション能力を高める、③総合的舞台芸術としての演劇に対する理解を深めるという3点を挙げている<sup>5)</sup>。特に②のコミュニケーション能力を高めることは外国語学習にとって欠かすことができない要素であり、学習者には「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能が求められる。前述した佐野（1990）は英語劇教育効果の項目2で「聞く」「話す」言語活動として挙げられていることを挙げているが、日高（2012）のゼミ生は「英語上演台本や歌詞の読解をする必要から「読む」力、また卒業論文等に執筆する関係から「書く」力も身につくと述べている<sup>6)</sup>。安藤（2014）の論文のなかでも、英語劇を実施したゼミ生のアンケートで「英語力の向上」を挙げ、「ほぼ毎日英語に触れている状態で自分の口で発話し、耳で聞くことが日常的になったので、英語との距離が縮まったと感じた<sup>7)</sup>」と言及している。

桃山学院大学の語劇は著名な作品をパロディ化し、学生が新たなオリジナル脚本を作るため、小学生の劇の手法と似ている<sup>8)</sup>。しかし、上演時間

は1時間半あり、各個人のセリフ量も多く、難易度も高いため、小学生の劇内容とは大きく異なるだろう。まず、学生の代表者たちが相談しながら脚本を考えていくため、教員による強制性が少なく、ストーリー自体に愛着を持ちやすい。既存の戯曲の場合、ストーリーに興味を抱けなかったり、難しい文学表現が出てきたりする可能性があるが、オリジナル劇の場合は学生がよく使う話しことばで書かれたため、イタリア語に翻訳しても難しくはない。学生は自分のセリフをイタリア語に翻訳するため、「書く」能力が発達し、そのイタリア語台本を繰り返し読むため、「読む」力も身につく。

劇の練習中、学生は相手のセリフを聴き、理解して自分のセリフを言わなければならないため、「聞く」「話す」能力が発達することは佐野（1990）の見解と一致している。その際、身ぶりや感情が伴うため、教室でイタリア語の文を読み流すよりも、自然に深い理解力が身につくといえるだろう。佐野（1990）は教育効果の項目3にある「非言語的手段と結びつけて英語を理解し表現する」のなかで、「コミュニケーションは言葉だけでなされるものではありません。実際は、様々な身ぶりや表情や身体の向きなどの助けを借りて表現し、また、相手の様子を見て言葉を解釈しているのです。ある調査によれば、感情表現の約80パーセントは言葉よりむしろ、非言語的手段を用いているそうです。現実の生きた言葉は、単なる記号ではなく、身体と心と結びついて初めてコミュニケーション手段として機能するといえるでしょう」<sup>9)</sup>と述べている。劇の練習中に身ぶりを加えながら、内容を理解し、繰り返し暗記することで脳にインプットした言葉は忘れにくくなる。また、語劇では自己だけでなく、他者の話も理解し、その場に応じた表現が求められる。このように身体と心が結びついた対話（インタラクション）は外国語を深く認知する有効な手段となるだろう。語劇のような疑似的コミュニケーションの場を体験することで、実際の場面においても

## 「語劇」による教育効果の多様性

アウトプットの自動化が起きやすくなると推測できる。

佐野（1990）が項目7で言及しているように、「生徒に英語学習の目的意識と成功感を与える」ことは非常に重要である。教室という閉鎖的な空間で、学習者に語学を習得させるための高い動機づけを与えることは難しい。特にイタリア語履修者にとって、最初の学習動機は「イタリアに旅行したい」「イタリア料理が好き」「サッカーが好き」「ファッションに興味がある」などといった軽い内容のものが多いため、別の動機づけをしなければ、学習意欲が持続しない恐れがある。その点において語劇は、「舞台を成功させる」という大きな目標があるため、当初は不安に思っている、練習を進めていくうちに、「自分が失敗して恥をかかないように」、また「他人に迷惑がかからないように」と意欲的に学習するようになる。

さらに高い動機を学習者に与えるために、佐野（1990）の項目6にある「楽しみながら英語を学ぶことができる」ことに注目したい。「楽しい」「面白い」という気持ちは語学を習得するための重要なファクターとなりうる。語劇はエンターテインメント性を有するため、観客が楽しめるものを劇の内容に盛り込む。その際、演者が楽しいと思うものを選択するため、観客も楽しめる。演劇には喜怒哀楽があり、演者はそれらの感情を巧みに操り、演じ分けることで観客を喜ばせるのだ。学生はプロの役者ではないため、そのような喜怒哀楽をうまく表現することはできないかもしれないが、観客を意識し、可能な限りうまく演じようと努力する。その過程で他者を演ずることに面白みを感じる学生が出てくる。もちろん、演技自体が苦手で感情を表現することができない学生の方が多く、そのような面白みを感じない学生もいる。そこで、桃山学院大学の語劇では、より高い動機づけをするために、一般によく知られている物語をパロディ化する。ちなみに、これまで上演した作品は、『ロミオとジュリエット』（2005年）、『ピノキオ』（2006年）、『ピーターパン』（2007年）、『白雪姫』（2008年）、『シ

ンデレラ』(2009年),『不思議の国のアリス』(2010年),『トイストーリー』(2011年),『ウェストサイドストーリー』(2012年),『ハリーポッター』(2013年),『アナと雪の女王』(2014年),『イン・トゥ・ザ・ウッズ』(2015年)をもとに制作したオリジナル劇である。これらの題材は学生が決定し,学生が脚本化するため,学生自身の関心がわかりやすい。また,プロの役者のように演技だけで観客を楽しませることは難しいため,必ずその年に流行っている「お笑い」や「歌」を取り入れている。そのような「お笑い」や「歌」もイタリア語に翻訳し,暗記し,何度も練習するため,自然に楽しみながら語学を習得することができる。このように彼らが身近に関心を抱いている要素を語劇にプラスすることで,練習への積極性が増し,目的達成に向かって強い動機づけを得ることが可能となった。そこで次に,語劇上演後の学生の感想を通して,このような動機づけの有効性を検証してみることにする。

### 2-3 語劇のアンケート

毎年,語劇を振り返るため,語劇に関わった学生全員にアンケート調査を実施している。以下は2015年に上演した『イン・トゥ・ザ・ウッズ』後に学生たちが書いた感想からの抜粋である。

- ・最初は面倒で,あまり練習に参加できなかったが,他の学生のおかげで,練習に出るようになった。練習に参加してからは楽しく思えて,自ら進んで足を運ぶようになった。練習も堅苦しくなく,自分のペースでやらせてもらえた。最後には気持ちがひとつになり良いモノをつくりあげられた。
- ・最初は面倒だったけど,終わってみれば,この劇のおかげでみんなと仲良くなれた。スッチーと吉田[吉本新喜劇のお笑い]のところとか,

## 「語劇」による教育効果の多様性

お客さんがとても笑ってくれたのをみて、泣きそうになった。

- ・最初はやる気もなくセリフを覚えることが面倒だが、みんなと話していると段々うちとけていき、最後の方は練習に残るようになったし、もっと練習したいと思えるようになった。先生のところで劇ができてよかった。
- ・覚えの悪い私が涙目になりながらセリフを覚えたのはいい思い出です。本番が近づいても完成しなくてどうなるかわからなかったけど、最高の出来になってよかったです。
- ・劇を通してみんなが仲良くなり、みんなで楽しんだ。大学に入って、はじめて学校に来てよかったと感じた。
- ・最初は劇なんかしたくなかったし、放課後の練習も面倒だったけど、みんなと仲良くなって終わるのが寂しくなった。とても良い経験だった。
- ・劇のよいところはみんなで団結してひとつのものを創り上げ、かつ仲良くなり、ほかのクラスとも交流ができることかなと思いました。最後はやってよかったなと思いました。自分を出してうちとけることができて、とても良い経験をしました。
- ・最初は年も離れているので、うちとけないと思ったが、みんなが一生懸命、練習をしているのをみて、いい加減な気持ちを持っている自分が恥ずかしくなった。自分自身、任されている役を最後までやりきろうという気持ちに変わった。自分が一生懸命になると練習も楽しく、家でも歌の練習をした。劇が形になってきたらすごくうれしくて充実していた。遅くまでの練習はつらいこともあったが、最後までやり遂げることができてよかった。達成感もあり、最高の劇ができたから、やってよかった。
- ・達成感が半端ない。

・練習がはじまり、間に合うか不安になったけど、練習のあいだも色々なアイデアが出てきました。変更点多かったけど引っ張ってくれる人もいたし、文句も言わずにやってくれて、やりやすかったです。予定があっても事前に決めてた日はほぼ全員出席してました。私自身、劇が苦手だったけど、このクラスだからできたかな。

このように、初期には大半の学生が語劇に不安感を示し、人前で演技をすることを恥ずかしく思い、また放課後に残って練習することに負担を感じていた。しかし、練習途中から誰かが積極的にみんなの気持ちをまとめ、リードするようになると、各自が互いにアイデアを出しあったり、演技指導したりするようになった。積極的に参加しなかった学生も、教員に言われるからではなく、他の学生が頑張る姿を見て、自己を反省し、次第に練習に参加するようになり、一致団結していく様子が見えた。本番後、大半の学生の感想が「楽しかった」「やってよかった」「良い経験をした」「最高の劇ができた」「良い思い出になった」というポジティブなものばかりであった。もっとも、教員に提出するアンケートにはネガティブな感想を書きづらかったとも考えられるが、教員の目にも、「本番」という大きな舞台を終えた彼らが自信に満ちあふれ、仲間と喜びあう姿が印象的に映った。

さて、上で見たように、語劇で学生が「楽しかった」「面白かった」「頑張った」ことは事実であろう。だが、果たして彼らは語学力がついたと実感しているのだろうか。「活動（語劇の上演）が目的化している」だけではないのだろうか。

語学力が向上したかどうかは、劇後の感想から判断することはできなかった。しかし、卒業生を対象にアンケート調査（2016年4月）を実施し、語劇によってイタリア語が上達したか尋ねたところ、「まあまあ」と答える



### 「語劇」による教育効果の多様性

者が半数いた。主役級の役をした者のみが、「大変よい」と回答している。「まあまあ」と答えた者の理由として、「セリフは上手になったが、日常会話に応用できるかわからない」という意見が多かった。また、「大変よい」と回答した者は以下のように述べている。

- ・セリフで話すイタリア語を日常の場面でも応用して使うことができた。それに何度も練習したことによって発音がよくなったと思う。
- ・メインの役をさせて頂いたので、留学中のイタリア人の学生<sup>10)</sup>にも協力してもらい、最低限恥ずかしくないようにした。すると少しずつではあるがコミュニケーションが取れるようになっていった。

この回答をしたのは、語劇後に留学を経験した者である。よって、語劇の中で大量にインプットした語彙が実体験において、自動的にアウトプットされるのを認識できたのかもしれない。一方、「まあまあ」と答えた者は、自己のセリフを暗記し、動作を交えながら演じていたが、覚えたセリフを実際に使う機会が少ないため、実感が伴わなかったのかもしれない。だが、通常の授業で覚えた単語や文法も日常会話に応用する機会がないのは同じである。語劇は筆記試験という形式をとっておらず、各自が習得している語彙が異なり、他者と比較することができないため、到達度を測りにくいともいえる。

しかし、彼らのセリフ量を考えると、主役級の学生は計3ページほどに相当するイタリア語の内容を理解しながら覚えており、最もセリフの少ない学生でも平均5行は覚えている。また、セリフ以外に2曲ほどのイタリア語の歌を暗記し、歌う必要がある。本格的に劇の練習を実施するのは、2ヵ月程度であり、その間にセリフや歌を完全に暗記する。また、練習で繰り返し他人のセリフをリスニングし、時には代役として他人のセリフも

発話するため、相当量の語彙を短期間にインプットしているのである。このように学生が努力し、ある程度の成果を上げているにも関わらず、本人たちがそれを自覚することができないのは指導者の責任であろう。このアンケート調査の結果を受けて、教員はもっと学生に語劇の学習効果について説明しなければならないと感じた。

ただし、下の劇後の感想（2015年）を読むと、学生は自身の語学力向上について客観視することはできないが、他の学生を評価することはできるようだ。

- ・ 赤ずきんは2人とも、セリフがスムーズに言えて、イタリア人のように見えた〔下線論者〕ので、すごいと思いました。動作もセリフの言い方も赤ずきんらしくてかわいかったし、躍動感がありました。2幕の魔女役の子には驚かされました。感情がこもっていて、プロの役者かと思いました。本物の魔女をみているようでした。2幕のポテトヘッドの子はリハーサルの時点で、わたしも笑いが止まらなかったのですが、本番でも爆笑してしまいました。すごく恥ずかしさがあるのに恥ずかしがらずに楽しそうにやっていて、こっちまで楽しかったです。3幕の王子役の子は宝塚を見ているような気分でした。セリフの言い方も動作もすべてかっこよかったです。

イタリア語の発音は学生たちの母語である日本語の距離と比較的近いと言われているが、日本語よりもテンポが速く、早口で話すため、イタリア人のように流暢に発話するのは難しい面がある。しかし、「イタリア人のように見えた」ということは、赤ずきんを演じた学生たちが自然な発話心がけ、練習した成果だといえよう。また、劇の中でお笑いのネタをイタリア語で行うには、かなり高度なテクニックが必要になる。漫才のような

## 「語劇」による教育効果の多様性

「対話」をするには互いのテンポと呼吸を合わせつつ、イタリア語の音のタイミングも考慮しなければならない。これらの困難を克服し、役になりきらなければ、「笑い」を生み出すことはできない。

語劇後の感想やアンケート結果から、学生が語劇を通じてイタリア語を積極的に学習しようとする姿勢が見えた。自然な発話を心掛け、非言語的手段を駆使し、他者のセリフを聞き理解し、楽しみながらコミュニケーション能力を高めることが可能である語劇は、外国語学習（「読む」「書く」「話す」「聞く」）に欠かせない能力を養う有効な手段となりうる。

これまで学生が「語劇」を通じて、語学教育上の基礎能力を身につけることを中心に述べてきた。だが「語劇」には外国語教育以外の教育効果も見られる。それは演劇活動中に、他者とコミュニケーションを取らなければならない場面において目にする人間としての個人の技能や成長、あるいは他者との関係を構築しようとする姿勢である。

### 3. 語劇の全人教育・アクティブラーニングとしての効果

#### 3-1 「演劇／ドラマ教育」

演劇あるいは教室で行うドラマ方式の教育は、外国語あるいは母語（国語）の教授法として活用される場合が多いが、欧米では、人間を育成する汎用性の高い教育として有効な手段であるとも考えられている。

イギリスにおいて、「ドラマ教育」（Drama in Education=DIE）とは「生徒たちが役を演じながら探求する参加型の学習形式で教師によって導かれる」ものと定義づけられている<sup>11)</sup>。1911年にハリエット・フィンレイ＝ジョンソンが「子供を教育する手段として演劇が有効である」と主張して始まったイギリスのDIEの歴史は1950年～1960年代には「ドラマ教育」の先駆者であるピーター・スレイドやブライアン・ウェイによって引き継がれた。ウェイは「ドラマ教育」の目的は「全人的教育」あるいは「全人

的発達 (the development of the whole person)」を目指す教育だと主張した<sup>12)</sup>。それ以降、イギリスとアメリカを中心に様々な「ドラマ教育」の方法論<sup>13)</sup>が生み出され、教育現場において実践された。イギリスのウォークリック大学教育学部ドラマ演劇教育プログラムの主任教授であるジョナサン・ニーランズは、ドラマ (drama) と演劇 (theatre) を一連のつながりとして、そこに至る過程においても学びの機会があると指摘している<sup>14)</sup>。

語劇の最終目的は観客を前に上演する舞台発表ではあるが、それに至る過程（プロセス）も欠かすことができない教育の一環である。しばしば、「演劇教育」と「ドラマ教育」を一緒にして論ずる場合と、上演を目的とした「演劇教育」と上演を目的としない「ドラマ教育」と区別して論ずる場合があるが、本稿では双方の論を尊重し「演劇／ドラマ教育」としたい。

日本の「演劇／ドラマ教育」は児童への教育を中心に発展し、児童が行う学芸会は明治末期から大正期のはじめにかけて学校行事として普及した<sup>15)</sup>。1923年の小原国芳の『学校劇論』では、ウェイに先駆けて「全人教育」という言葉を生み出しているのが興味深い。小原の論は富田（1998）が6項目に編集し以下のように定義づけている<sup>16)</sup>。

- ① 芸術教育と学校劇の必要性について。わが国では演劇への無理解、謬見があるが、全人教育の立場からも、これを見直し、重視する必要がある。
- ② 劇そのものへの誤解がある。総合芸術としての演劇を正当に見直す必要がある。
- ③ 児童の本性である劇的なものを抑圧していることへの反省が必要だ。
- ④ 高尚な趣味を与えるためにも学校劇が必要である。
- ⑤ 芸術革新運動としても学校劇の重要な意味がある。

## 「語劇」による教育効果の多様性

- ⑥ 家庭教育，父兄教育のために，家庭での自由な演劇活動が大事であり，それへのいざないとして学校劇が必要である。

小原の言う「全人教育」とは，現代の「総合教育」を意味し，教科の垣根を超え，人間として必要な教育を行うことを目的としている。

劇作家，演出家であり，大阪大学コミュニケーションセンター教授である平田オリザは，社会（ビジネス）に役立つ能力として，「演劇を上演する力」「演劇を上演することで培われる力」に注目し，それらをまとめて「演劇力」と定義づけている。彼は「演劇力」には3つのスキル（脚本力，演出力，演技力）があり，これらが伴うと，他者とのコミュニケーション能力が向上すると述べている<sup>17)</sup>。

2-3で挙げた語劇後の感想やアンケートの中にも，人間としての成長が感じられ，コミュニケーション力がなければ，成功しない記述が多くある。例えば，以下の感想から，A君がリーダーシップを発揮し，他者との関係をまとめ，一致団結しながら問題を解決していく様子を感じられる。このA君とは語劇全体のリーダーでもあり，1幕の主演を演じた学生のことである。

- ・ A君がみんなに声をかけ，SNSでも長文でみんなにアドバイスをしてくれた。それで，自分もやらなければという気持ちになった。
- ・ A君がクラスをまとめてくれたり，一人一人のセリフをチェックしてくれたりしたので，一致団結できた。

クラスには様々な性格の学生がいるが，語劇を創り上げるには団結力が必要であり，嫌いな相手とも人間関係を構築しなければうまくいかない。去年（2015年）の例でいえば，授業中にペアワークをさせても，他人と話

すことに抵抗を感じ、人前では小声でしか発話しない無気力な学生（B君）がいた。だが、語劇の練習をするようになったとき、A君がみんなを先導し、彼を仲間と打ち解けさせ、みごとにクラスの輪に入らせた。舞台で大勢の前で堂々とセリフを言ったB君の姿が大変印象的であり、驚きでもあった。「演劇」活動では、教室で座って授業を受けているだけでは、決して起こらない様々な問題に直面する。そうした壁をいくつも乗り越えなければ、舞台を成功させることはできない。また、それらの問題は学生自身が解決する必要がある。なぜなら、劇は教員が創るものではなく学生が創造するものだからだ。学生が主体的に動くことによって問題に気づき、彼らの手で解決していく。そのなかで、リーダーシップ力、他者との協調性、問題解決力、チームワークなど、社会（ビジネス）において必要な能力が養われていくのである。「人前に出るのは面倒だ」、「恥ずかしい」などと言っていたら、社会に出て生きていくことはできない。教員には学生が様々な問題に気づきやすいようにサポートすることが求められる。

### 3-2 卒業生のアンケート調査

実際に社会（ビジネス）において、語劇の経験が役立ったかどうか、社会人となった卒業生にアンケート調査を実施したところ、以下のような回答が得られた。

- ・現在、会社内のみならず、様々な企業の上役と企画会議、経営についての討論になる場合、きちんと自分の内容を伝えつつ、相手方の意見を聞くこと、人をまとめ同じベクトルで進むことといったことは語劇で学んだことがそのまま生かされている。またその役を全うする責任感。それは自分自身仕事をしている中で必要なことであり、学生で学べることは大きいと社会人になって感じる。ある種、仕事をするこ

## 「語劇」による教育効果の多様性

はその役に演じることなのでそれが体験できたイタリア語劇は大変役立った。

- ・ あれだけの人数の前で声を張って役を演じ切ったので、多少なりとも度胸はつきました。また、劇をする前は自分のことを中心に考えていましたが、劇をしたことで周りを見ることができるようになりました。その結果、良い意味で周りのペースに合わせられるようになりました。
- ・ 目立ちたくないタイプですが、みんな絶対セリフがあり、全員が舞台に立つため、イタリア語を履修しなければ絶対しなかったような経験ができた。劇全体に関われたので、自分の苦手なリーダーシップ的な立ち位置も経験できた。
- ・ コミュニケーション力が向上した。
- ・ 後輩への指導力がついた。
- ・ 人前に立って表現することに慣れた。
- ・ 子供の前で話することが仕事なので、語劇で培った声量、身ぶり、表現の仕方等の経験が役立っている。
- ・ プレゼン等で役立つので、教職を目指すなら必要な経験だ

また、「社会人としてのスキルを身につけるために語劇は必要か」どうか尋ねたところ以下のような回答を得た。

- ・ こういう経験はなかなか出来るものではないですし、大学生になると、みんなで協力して一つの大きなことをやり遂げる機会もあまりないので続けていくべきだと思います。やりたくないと思う生徒もいるとは思いますが、社会に出た時に自分のやりたいことだけをできるとは限らないし、そういう場面でも最高の結果を出すのが社会人なので、是非続けてほしい。

- ・ 社会に出ると必ずリーダーシップをとる場面が出てくる。提案力やコミュニケーション能力も問われるので語劇は必要だと思う。
- ・ 色々な人とコミュニケーションがとれる機会なので、これからも続けていってほしい。
- ・ 大勢でひとつのことをやり遂げるための工夫や自分の立ち位置がよくわかる。学業とバイトを両立することでタイムマネジメントの能力もつくので語劇は必要だ。

彼らの見解にあるように、人前でコミュニケーションを取ること、指導者としての責任を果たすこと、みんなで協力して大きな仕事を成功させることなど、社会人として必要なスキルを身につけるための諸要素が語劇という共同作業のなかに含まれていると考えられる。

「演劇／ドラマ教育」は、学生の主体性を身につけさせ、特に「キャリア教育」に必要な能力を養わせるために、きわめて有効な手段になると考えている。近年、大学において授業にアクティブラーニングを取り入れようとする動きがあるが、こうした「演劇／ドラマ教育」こそ、まさにアクティブラーニングが目指す教育が達成できる一学習形態であるといえるのではないだろうか。

### 3-3 アクティブラーニング

2012年の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』において、アクティブラーニングが取り上げられた。この中で、アクティブラーニングについて以下のように定義づけされている。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な



## 「語劇」による教育効果の多様性

学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等によっても取り入れられる<sup>18)</sup>。

「演劇／ドラマ教育」は常に行動が伴うため、受動的な学習になることは少ない。また学生が主体性を持って学習内容を認知し、倫理に従った行動をし、教養を身につけながら体験することで問題解決能力、コミュニケーション能力、認知的・倫理的・社会的能力が高まるため、アクティブラーニングが目指す方向性と一致するだろう。

日本におけるアクティブラーニングの第一人者として知られる溝上慎一教授によると、この答申にある“能動的学習”とは一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的学習のことだと定義している。その学習プロセスのなかに活動（書く・話す・発表するなど）があり、さまざまな次元の技能・態度（能力）の育成、特に「情報・知識リテラシー」の習得につながる学習がなされることが望ましいと補足している。また、そこで生ずる認知プロセス（知覚、記憶・言語・思考〔論理的／批判的／創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決など〕）を外化させ、書く、話す、発表するなどの活動と十分に協奏させることが、より良いアクティブラーニングにつながると述べている<sup>19)</sup>。

語劇では脚本を「書き」、練習で仲間と「話し」、公に「発表する」場がある。溝上（2014）が言及する活動をし、その中で他者とのコミュニケーションをはかり、リーダーシップ力やチームワーク力が高められていくのだから、さまざまな技能や態度が育成されやすい。また、学生がオリジナル劇の脚本を書くためには、さまざまな情報や知識をネット等で収集しな

なければならない。このように、語劇における過程あるいは発表の場において、認知プロセスが外化されやすい状況が生み出されるようにみえる。

### 3-4 アクティブラーニングにおける問題点

アクティブラーニングの問題点として、アクティブラーニング型授業（以下 AL 型授業）に対して抵抗感がある学生が多いことが挙げられる<sup>20)</sup>。

実際に AL 型授業に対する大学生の認識調査を実施した神戸大学の研究報告論文によると、学生は AL 型授業の重要性を認識してはいるが、グループワークや発表など他者と関わることが苦手、または不特定多数の信頼関係ができていない人間と意見交換をする心理的負担が苦痛、自ら調べたりするなど時間外学習を強いられそうだから面倒だという理由で「AL 型授業に参加したくない」という学生の意見が出されている<sup>21)</sup>。本稿の 2-3 にあるように、このような不平や不満は実際のイタリア語劇を創作しようとする初期段階で常に生じてきた問題である。だが、このように心理的苦痛を伴う授業も、ヴァイオラ・スポーリンのシアターゲーム（即興で台本を用いないゲーム形式の演劇エクササイズ）のように楽しく学習すると、感覚を高め、自分への気づきを促し、相手とのコミュニケーションをよりうまくとれるようになってくるようだ。だから、彼女のシアターゲーム理論は、演技トレーニングとしてだけではなく、教育学や心理学、コミュニケーション学といった演劇とは直接関係ない分野からも注目されている<sup>22)</sup>。神戸大学の論文でも「AL 型授業に参加する抵抗感の方が AL 型授業から得られる満足感、達成感、学習成果よりも大きい場合、積極的に参加したいと考える学生は少ないだろう。裏返して言えば、AL 型授業に参加することの先入観、達成感、学習成果が大きくなれば、学生はより積極的に AL 型授業に参加することが期待できる。」<sup>23)</sup>とある。つまり、学生に「面倒そう」だという先入観を取り除き、楽しくて、達成感があり、学習成果が望

## 「語劇」による教育効果の多様性

めるような授業であれば、AL 型の授業の効果は期待してもよいのではないか。前述した語劇後の感想や学生の語劇前の反応を振り返ると、語劇をする前の学生はまさに「面倒くさい」、人前に出て発表するなど「恥ずかしい」、「時間の無駄」だと考えている者が大半をしめる。また、あまり重要ではない役や裏方の業務につきたがる。ところが、舞台発表後は、そのような否定的な意見は、ほぼなくなり、「楽しかった」、「やってよかった」などの達成感のみが残る。「学習」は決して、楽をして習得できるものではない。試練や困難を伴うからこそ、手に入れたときの「達成」あるいは「充足」感も大きくなる。集中力が足りない、授業に興味を持たないモチベーションの低い学生に対して、講義型のような受動的な学習を受けさせても、寝ていたり、スマートフォンを操っていたりするだけで、何も聞いていない場合がある。知識をより効果的に習得するためには、学生が主体となり、自ら課題を探し、問題を解決し、体験し、発表する AL 型の授業を推奨したい。また、様々な AL 型授業が実践されているが、学生にとって達成感をより強く感じさせ、学生の主体性と汎用的な能力が発揮できる「演劇／ドラマ教育」の可能性を探りたい。

## 4. 桃山学院大学での実践の検証と改善策

実際にイタリア語劇がどのように制作され、学生が、どれだけ主体性を持って行動しているか、教師の役割はどのようなものをイタリア語劇の実例（2015年）を挙げて報告する。その中で、本稿で述べた「外国語教育」、「演劇／ドラマ教育」、「アクティブラーニング」などの見解を踏まえて、著者が語劇に必要なと考えた以下のようなチェック項目が実践できているか検証する。

- ① 学生が興味を持つような楽しい要素が入っているか。

- ② 学生が主体となって行動できているか。
- ③ 教員の役割は受け身か。
- ④ 「聞く」「話す」「読む」「書く」などのイタリア語の4技能が学習されているか。
- ⑤ 個人の技能が発揮されているか。
- ⑥ 他者との関係により、リーダーシップやチームワークなどの協調性が構築されているか。
- ⑦ 他者とコミュニケーションを取りやすい状況を生みだしているか。
- ⑧ 問題解決学習になっているか。
- ⑨ プレゼン力が発揮されているか。
- ⑩ 異文化（イタリア文化）を知るきっかけを与えているか。
- ⑪ 振り返り学習ができているか。
- ⑫ 活動が目的化していないか。

イタリア語は3クラスあり、3幕に分けて、クラスごとに1幕ずつ担当しているため、表1にあるⅧの総合リハーサル、本番以外はすべて個別のクラスあるいはホールにて学習する。1クラスの上演時間は約30分だが、最後の歌とダンスは合同で行う。

項目①にある「学生が興味を持つような楽しい要素が入っているか」に関してはⅠ、Ⅱ、Ⅲにある脚本を考えるとところから学生の意見を聞き、学生が興味ある「笑い」「歌」「ダンス」等を脚本に入れることによって、学習意欲を高めている。課外活動においても、それらの練習をメインにすると、大半の学生が積極的に練習に参加したいという気になる。「ダンス」は語学と関係がないと思われるかもしれないが、ダンスで使用する歌はイタリア語であり、イタリア語を何度も聞きながら、身体で表現し、イタリア語で歌う。故に、記憶に残りやすく、イタリア語の音のリズムも把握す

「語劇」による教育効果の多様性

表 1

	学生の役割	教員の役割	活動とその時期	
			授業（伊語Ⅳ）	課外活動
I	・ 去年のイタリア語劇鑑賞 ・ 感想アンケート記入 ・ 幹部の選出 ・ 上演する作品案を出し合う	・ 過去の作品、幹部の役割を解説	「クラス会議」 イタリア語Ⅲ の授業1コマ （6月上旬）	
II	・ 上演する作品案を出し合う ・ 幹部総会にて全体のリーダー、 上演作品を決定	・ 過去の作品、幹部の役割を 解説し、学生の興味に合わ せて、どの上演作品が望ま しいか一緒に考える		「幹部総会」 昼休み （6月下旬～ 7月上旬）
III	・ 脚本のプロット案を出し合 う ・ 登場人物、歌、ダンス、お 笑いなど脚本に取り入れる 要素を検討 ・ 脚本を書く	・ 学生が考えるプロット案を 助け、実現可能かどうか考 え、適する方向へ指導する		「各クラスで の幹部会」 幹部総会後～ 夏休み前半 （7月上旬か ら8月）
IV	・ 書いた脚本を教師に送る ・ 訂正があれば脚本を書き直 す	・ 脚本を吟味し、セリフ量を 調整しながら全体を改訂		「脚本仕上げ」 （9月）
V	・ 自薦、あるいは他薦にて配 役や裏方を決定	・ 配役・裏方の役割を解説	「配役・裏方 スタッフ決定」 （9月下旬）	
VI	・ 各役に合わせて日本語台本 をイタリア語に訳す	・ イタリア語台本を作成 ・ イタリア人にネイティブ・ チェックを依頼	「イタリア語 台本作成」 （9月下旬～ 10月）	
VII	・ イタリア語台本を暗記、発 音練習 ・ 歌やダンスの練習 ・ 台本に合わせて舞台稽古 ・ 裏方の仕事	・ 発音やイントネーションの 指導 ・ 演技や舞台演出は学生の意 見や意向を聞き、教員が中 心にならないように心がけ て指導 ・ 裏方の仕事補助	「練習」（10 月～11月）	「放課後練習 （週2回程度）」 （10月終わり から本番まで）
VIII	・ 舞台発表 ・ 裏方の仕事	・ 裏方の仕事補助	「試験」	「総合リハー サル」（本番 前日）「本番」 放課後（12月 上旬）
IX	・ ビデオ鑑賞 ・ 感想		「振り返り学 習」	

ることができる。また、ダンスや歌は、項目⑤「個人の技能が発揮されているか」の個人の技能が発揮しやすく、その技能を他の学生に教えることによって、リーダーシップ力や協調性を養うことができる。また、歌やダンスだけではなく、楽器が演奏できたり、絵がうまかったりする学生がいれば、それらの要素を積極的に劇に取り入れる工夫をしている。学生がもともと培った才能を生かすことで、彼ら自身の自信につながり、語劇への学習意欲が向上するからだ。項目②「学生が主体となって行動できているか」は、表1の「学生の役割」すべてが学生主体の活動であり、逆に項目③の「教員の役割は受け身か」は「教師の役割」すべてに言える。だが、実際にはⅦにある劇の演技あるいは舞台演出の指導中に学生の意見を求めずに、教員指導型になる場合もある。それは本番までに完成しないのではないかという焦りから生じている。だが、演ずるのは学生自身であるから、演技や演出で教員が口をはさんだとしても、助言であることには変わりがない。項目④の4技能に関しては2-2において前述している。項目⑤の個人の技能とは、学生が元来有する個別の能力のことであり、語劇のあいだに身につく別の能力のこともある。別の能力とは、項目⑥、⑦、⑧、⑨にあるリーダーシップ力、協調性、問題解決力、他者とのコミュニケーション能力等のことである。彼らは本番前の1ヵ月、Ⅶにおいて、「劇を成功させる」という大きな目標に向かって、仲間とともにアイデアを出し合い、試行錯誤を繰り返しながら行動する。また、劇の裏方の仕事も同時に学習していく必要がある。音響係は劇で使う音源を編集し、劇中のタイミングを考えながら、音響を操作する。照明係は劇中の照明を考え、照明やスポットの操作を覚える。パソコン係は日本語字幕を投影するためにパソコンで字幕や背景の映像を作り、セリフのタイミングに合わせて操作しなければならない。その他、舞台に使用する小道具や大道具を作成したり、衣装を考案し調達したりしなければならない。どれも語学とは関係のない

## 「語劇」による教育効果の多様性

学習のように思えるかもしれないが、その作業を通して個人の技能が発揮され、また他者とコミュニケーションしなければならない場が増えていくため、多様な能力が養われる。特に大事な局面はやはりⅧのリハーサルから本番にかけてである。明日が本番と迫ったときの学生の焦燥感は最大に大きくなり、もし、この時点で問題が発覚した場合は、チーム一丸となって問題解決しようと動き回る。項目⑨にある「プレゼン力が発揮されているか」は、当然だが、本番において、その能力が発揮されている。100名程度の観客を前に、彼らは長いイタリア語のセリフを言い、観客に伝わりやすいように身体で表現し、歌い、踊る。よって、彼らの緊張感が演技力を高め、最大のプレゼン力を養うことになる。実質的には2ヵ月間で形にするのだが、短期間だからこそ、彼らの力が結集され、途中で怠惰に陥ることなく成功を手にし、大きな達成感が得られるのだ。

また、アクティブラーニングの問題点で一部の特殊な教員にしか授業をすることはできないという見解があるが、語劇を行うイタリア語Ⅳの担当教員は3名おり、その3名とも指導にかける時間数がほぼ同じで、それぞれの成果を残している。よって、語劇という教授法は挑戦できる環境さえ整えば、どの教員でも学生の主体性を育成する教育法になりうるのではないかと考えている。語劇もアクティブラーニングの問題同様に、学生の抵抗感は根強い。だが、「語劇を成功させる」という高いモチベーションがあるかぎり、学生の多彩な能力が引き出される可能性も高い。通常の授業ではモチベーションが上がらない学生も語劇なら自分の経験や能力を生かし、周りとは協調しながら自然と意欲的に学習するようになるかもしれない。

このように項目①～⑨までに関しては、本稿ですでに述べてきたことから、一定の成果が上がっていることが確かめられるが、残りの3項目に関しては、課題が残っていることを否めない。項目⑩の「異文化（イタリア文化）を知るきっかけを与えているか」に関しては、留学生と話したり、

劇中に食やサッカーについてなど、イタリア文化をセリフに入れたりすることで、イタリアに興味を持つきっかけ作りはできているようだ。だが、歴史・芸術・文学などに触れる機会は少なくなりがちである。

また、項目⑪の「振り返り学習ができているか」と問われれば、Ⅸにあるようにビデオ鑑賞と感想のみのため、もう少し工夫が必要だと教員間で思案している。また、劇の成功を目標に努力してきた学生は、その目的が達成すると、力尽き、その後の学習を想像できない場合がある。それ故、項目⑫の「活動が目的化していないか」どうか不安な点が残る。だが、今後、他の教員とともに、「振り返り学習」を強化していくことで、学生に「演劇／ドラマ教育」の意義を語り、語学力のみならず、将来につながる汎用的能力を養う教育であることを認識させる指導をしていきたいと考えている。

## 5. 結 語

外国語教育において、他者と非言語的手段を用いて、身体と心でコミュニケーションを取り、正確な文と自然な発話を学ぶ機会を作ることは重要である。教室内の学習で真の疑似コミュニケーションの場を構築するには限界があるが、舞台上ならば、それが可能だ。また、「語劇」を上演するには教員は完全な裏方であり、主体は学生である。学生がさまざまなアイデアを出し、彼らの潜在している能力や過去において身につけた技能をすべて発揮しなければ、短期間に一つの作品を創ることはできない。学生は演劇活動を通じ、他者と深く関わりながら、コミュニケーションを形成する。その間、協調あるいは衝突しながら、新たな創造や能力が育まれ、その中で自己や他者に課された問題を探求し、体験しながら学習していく。

従って、「語劇」という教授法によって、学生は外国語学習において不可欠な「話す」「聞く」「読む」「書く」という4技能を習得するのみでは



## 「語劇」による教育効果の多様性

なく、社会で活躍するために必要な総合的なスキルを身につけることが可能である。また、「語劇」は「劇を成功させる」という全体目標があるため、さらに学生を楽しませる要素を劇にプラスすることで、当初、「不安」「面倒だ」と感じている学生にも高い動機付けを持続させることができる。故に、「語劇」は学生の未来に展望を与える教育になりうるのではないか。

### 注

- 1) 東京外国語大学にいたっては2004年に文科省から「特色ある大学教育プログラム 特色 GP」にも選ばれている。<http://tanigawamichiko.hatenablog.com/entry/2014/11/30/091106> (2016年 5 月30日閲覧)。
- 2) “Hi, friends! 2” 年間指導計画例。  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2012/07/10/1315115\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2012/07/10/1315115_02_1.pdf) (2016年 5 月30日閲覧)。
- 3) 佐野正之(編)『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部, 1990年, pp. 11-15。
- 4) 「小学校学習指導要領」第4章, 外国語活動。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm) (2016年 5 月27日閲覧)。
- 5) 日高真帆「英語劇の上演と大学教育への応用」『京都女子大学英文学会英文学論叢』第56号, 2012年, p. 14。
- 6) 同書, pp. 12-13。
- 7) 安藤栄子「英語劇を取り入れた授業の効果」『日本大学国際関係学部国際関係研究所』35巻1号, 2014年, p. 48。
- 8) 小学生の劇は第6学年の終わり, すなわち2年間の学習の締めくくりとして, カリキュラムに導入されている。桃山学院大学におけるイタリア語の語劇はイタリア語Ⅳ, つまり, 2年間の学習の最後に行う実技形式の演習として位置づけている。ただし, 授業時間外の練習と公開上演に関しては課外活動として実施している。
- 9) 佐野, 前掲書, pp. 12-13 参照。
- 10) イタリア人留学生がいる場合は彼らも語劇に出演し, 日本語で役を演ずる。

また、イタリア語の発音や脚本のチェック等も彼らが担当し、教員はイタリア語履修生と彼らがコミュニケーションをとれる場を構築する。そもそも、語劇をすることになったきっかけは、イタリア人短期留学生在が大学に来ているにも関わらず、イタリア語履修生と交流する場がなかったことから始まった。

- 11) Bennett, Stuart, *Theatre for Children and Young People: 50 Years of Professional Theatre in the UK*. London, 2005, p. 16.
- 12) ウェイは人間の発達を①集中, ②感覚, ③想像, ④スピーチ, ⑤身体, ⑥感情, ⑦知性, ⑧直観 (のちに追加) で示し, ドラマを通じて調和のとれた人間の発達を目指した。Way, Brian, *Development through Drama*. Atlantic Highlands, N. J, 1967, pp. 2-3. 「ドラマ教育」の歴史に関しては, 小林由利子『ドラマ教育入門』図書文化, 2010年の第一章, pp. 9-22 を主に参照。
- 13) 欧米の「ドラマ教育」はクリエイティブ・ドラマ, インフォーマル・ドラマ, 教育的ドラマ, DIE, プロセス・ドラマなどを含み, その方法論は多岐にわたる。
- 14) Neelands, Jonathan & Goode, Tony. *Structuring Drama work: A handbook of Available Forms in Theatre and Drama*. 2nd ed., Cambridge, 2000, p 105.
- 15) 日本の演劇教育の歴史に関しては, その第一人者である富田博之『日本演劇教育史』, 国土社, 1998年に詳しい。
- 16) 同書, p 247。小原の論は増田信一『演劇的学習の建設』, 同朋社, 2004年にさらに詳しく引用されている。
- 17) 平田オリザ, 蓮行『コミュニケーション力を引き出す—演劇ワークショップのすすめ』PHP 研究所, 2009年, pp. 120-162。
- 18) 中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～』2012年, p. 37。  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf) (2016年5月30日閲覧)。
- 19) 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 2014年, pp. 6-23。
- 20) 松下佳代編『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』勁草書房, 2015年, pp. 3-6。

「語劇」による教育効果の多様性

- 21) 近田政博, 杉野竜美「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識：神戸大学の調査から」『大學教育研究』23巻, 2015年, pp 14-18。
- 22) 小林由利子, 前掲書, p. 88。
- 23) 近田政博, 杉野竜美, 前掲書, p. 17。

## **The Effect of Diversity in Drama and Theatre Education for Language Learning**

NAWATE Eri

In recent years, the teaching method called ‘active learning’ has attracted attention in accordance with the report of the Central Council for Education in 2012, which recommends learner-centered education for the purpose of developing skills of the students. From such a point of view, the drama education is thought to have various benefits.

First of all, drama helps improve an integrated ability in language learning. In practicing drama, the student reads the script, memorizes his/her lines, repeats them aloud again and again, listens to others and carries on the conversation considering the context. In this way the student can also build up communicative competence. This is a great advantage of drama education.

In addition, since the Meiji era, drama-theatre education has been recommended as an effective method of general education for the formation of character and has been adopted in child education. Brian Way and other researchers argue that the purpose of drama education is “the development of the whole person.” In drama activities the student faces various problems. In order to solve the problems, he/she tries to establish good relationships with others. Through such experiences the student will learn to cooperate and collaborate, acquire leadership, and become a helpful person.

Drama education, in which the student has opportunities to behave actively and acquire a variety of skills and competences, accords with the concept of ‘active learning.’ Statistics show that students themselves tend to be reluctant to participate in ‘active learning’ types of classes. However, by maintaining in them high motivation ‘to make the drama successful,’ it will be possible to

render them more positive.

In this paper I examine the drama activities practiced in Italian language classes at Momoyama Gakuin University to show the effects of drama education.